

ヤスパース『真理について』における「暗号」思想*

Der Gedanke um “Chiffre” in Jaspers’ *Von der Wahrheit*

布施 圭 司**

Keiji FUSE

概 要

ヤスパースの「暗号」(Chiffre, Chiffer)の概念は、『哲学』(1932)において詳しく論じられ、基本的にはその後も大きな変化はないと思われる。しかし、『理性と実存』(1935)以降、特に『真理について』(1947)で、「統一への意志」、「交わりの意志」という独特な「理性」概念が提起されるようになり、暗号思想にはいくつかの変化が見られると思われる。一つには、暗号現象における思惟の機能がより重視されるようになった点である。対象的存在を超越する内的な変革を踏まえた上で、世界内で実存が行為することが暗号解読であり、世界内での行為には、思惟の積極的な機能が伴っているはずである。次に、『哲学』においても、諸暗号の間には緊張があることが主張されていたが、『真理について』では個々の暗号の不十分さが明言されるようになった。そして、『真理について』では理性の統一作用との関連で、暗号や真理の未完結性が語られている。個々の暗号はそのつど完成しているとも言えるのであるが、無制限の交わりという観点から見た場合、個々の暗号はそのつどの現れであり、暫定的である。

1 はじめに

ヤスパースは、実存に対する超越者の現れを「暗号」(Chiffre, Chiffer)と呼ぶ。暗号は世界内の事物と異なるものではなく、世界内の事物は経験的な自己存在にとつては概念的に規定され対象的に把握されるのに対して、本来的な自己存在である実存にとつては世界内の事物は超越者の現象という意味を持つという(1)。『哲学』(1932)において暗号は詳しく論じられ、基本的な概念はその後も大きな変化はないと思われる。

しかし、『理性と実存』(1935)以降、特に『真理について』(1947)で、「統一への意志」、「交わりの意志」という独特な「理性」概念が提出され、詳論されるようになった。思惟や交わりが重視されるようになったのに対応して、暗号論がどのように変化したかを本論考では論究したい。

2 道としての真理の完結…理性、愛、暗号

(1) 真理の未完結性

まず、『真理について』の全体の構成の中で、どのように暗号思想が位置づけられているか見ておきたい。『真理について』は、三部構成であり、第一部「包越者の存在」(Das Sein des Umgreifenden)で「包越者」が論究された後、第二部「認識の包越者」(Das Umgreifende des Erkennens)で認識の構造や意義が論じられる。そして第三部「真理」(Wahrheit)で様々な真理の意味や真理と非真理の相即が詳論される。

暗号は用語としては第一部から登場するが、主題となるのは、第三部の最後の「真実存在の完結」(Vollendung des Wahrseins)という章の、さらにまた最後の「哲学することにおける真理の根拠と完結」という節であり、「理性」と「愛」と共に時間における真理の完成の形として論じられる。そしてその中でも、理性、愛に続いて暗号が中心的なテーマとなるのは、その節の終りの部分である。従って、暗号思想は、『真理について』における結論的な議論とも思われるのだが、分量的に扱いは大きくはない。暗号の規定としては『哲学』の規定を踏襲しており、『真理について』における暗号思想は、『理性と実存』以降に導入された、「理性」や「包越者」(das

* 原稿受理 平成26年1月10日

** 教養教育科

Umgreifende)の思想とのつながりにおいて述べられている。「理性」、「包越者」の導入は『理性と実存』以降の重要な変化であり、それに伴い暗号思想も力点の置かれ方が変化していると思われる。

「真実存在の完結」という章の前半では、「包越者」概念を駆使しつつ、時間の中では真理の完結が現存在しないことが説かれる。「包越者」について簡単に触れると、そこで我々が対象に出会う空間が包越者と呼ばれる。対象的な存在の成立の所以をさぐると、我々の視野の限界に対象的存在を越え包む包越者が感得される。根本的にはあらゆるものを越え包む一なる包越者が超越者たる存在そのものであるが、それを分析しようとする、現存在、意識一般、精神、実存、世界、超越者といった区分に分かれる。包越者論の意義は、我々がそれである現存在、意識一般、精神、実存という様態それぞれで真理の意味は異なり、真理は分裂しており、あらゆるものの統一としての真理そのものは確実な存立物としては、虚偽を含み崩壊せざるをえないということを覚知させることと言えよう。

ヤスパースは、真理と非真理の相即の直観としての「悲劇」を詳論している。悲劇については本論考では詳しく論じることはできないが、一つだけ叙述を参照しておく。

「真理意志は悲劇的な知によって二者択一へ入り込んだ。生きて迷うか、それとも真理を把握しその元で死ぬかと。しかし悲劇的な知そのものの開放性 (Offenheit) ではなくて、合理的に固定的な解釈が初めてこのあれかこれかへと入り込んだのである。むしろこの選択の不気味な壮大さに対して次のことが対比される。完結した全体的真理は一人間がその元で死に至るのであれ、その内で安らぎを見つけるのであれ—我々にとっては時間現存在の内には存在しない。真理は時間の内にあつては常に途上 (Weg) にあり、今なお運動しており、そして真理の最も見事な結晶 (Kristallisation) においてすら最終的 (endgültig) とはならない。この根本状況を看過しないことが、哲学することが真実であり続けるための条件である」(Jaspers1947:960-961) (2)。

悲劇は、真理が完結されないという我々の現存在の状況を覚知させる。その意味で、悲劇の意義は『哲学』における「挫折」の暗号に該当すると言えよう。真理か死かという選択は「合理的な固定的な解釈」であり、悲劇は結果として悲惨へと至るが、そのただ中での真理との関係は、むしろ真理へと向うあり様である。結果としての悲惨のみに着目することは、挫折のみを重視する態度と同じく、かえって時間における真理の現象を捉えていないと言えよう。むしろ、悲劇に現れている直観 (悲劇

的な知) それ自身は「開放性」を有するとある。開放性とは真理への開放性、超越者への開放性と言えよう。悲惨な結果に陥る場合もあれば、安らぎを得る場合もあるというのは、世界内の基準で測った生の意義である。そのような世界内の基準とは別の生の意義が、悲劇には見られる。その生の意義とは、時間の中で真理への途上にあることであり、そのような真理へ向う途上にあることが、超越者と開かれるということと言えよう。『哲学』における「挫折」の叙述においても、挫折のみに止まることは否定的に捉えられていたが、『真理について』ではより明確に世界内で途上にあるあり方を重視する姿勢が見られると言えよう。

(2) 運動としての真理

このような検討を受け、暗号、理性、愛が主題となる「哲学することにおける真理の根拠と完結」という節が展開される (Jaspers1947:960 以降)。真理への途上にあることを、ヤスパースは「運動」(Bewegung) と表現している。「真理が完結 (Vollendung) した状態で現に存在しないならば、真理の完結が時間現存在の内て成功するであろう形式は、完結への運動それ自身である」

(Jaspers1947:961)。実存にとっての真理の形態、時間の内での真理の形態を、ヤスパースは真理の完結への運動と考えるのである。この運動が、「理性」、「愛」、「暗号」という三つの様相で語られる。「哲学される程度に応じて

(In der Maße als philosophiert wird)、一切の運動は理性的な運動となり、一切の衝動 (Atrieb) は愛となり、一切の対象的なもの、妥当的なもの、目的を持ったもの、為されたもの、創造されたものは、暗号となる」(Jaspers 1947:962)。理性、愛、暗号は、我々が時間の内て真理へと向かっている形である。哲学することがよくなされるほど、世界における我々の知的働きは理性の統一の働きとなり、衝動は結びつける愛となり、対象的なものは統一の姿を示す暗号となる。

「これらの本来的に哲学的な運動は、その完結を言わば安らぎの点 (Ruhepunkt) を通して自分自身の内にもっている。完結は、限界のない開放性 (die grenzenlosen Offenheit) そのものの内に、愛のそれぞれの行為の内に、暗号の直観の内にある」(Jaspers1947: 962)。理性、愛、暗号はそれぞれ真理そのものではないものの、それ自身の内に真理とのつながりがある。理性により開放性の内にあること、愛による一体化への行為、暗号による完成したものの表象といったものが、時間の中での真理への道である。この引用には「完結」という言葉があり注意が必要である。真理そのものの完結は時間内には存在せ

ず、ここで言われているのは時間における真理（即ち真理の現象）の完結、「真理への運動」の完結のことだと言えよう。「我々にとっての真理存在（Wahrsein）の完結は、時間の内にあるとまた時間の内にないというパラドックスがある」（Jaspers1947:870）とも言い表されている。そして、その運動の完結が「いわば安らぎの点を通して自分自身の内」にあるということは、運動の結果ではなく、運動そのものに運動の完結があるということと解せよう。運動の結果は、常に未完成なのであるから、結果に重点があるのではない。むしろ運動そのものが真理への道として重要であり、運動の意味はその結果にあるのではなく、運動のただ中にあることである。「安らぎの点」とは運動そのものと解すべきだと思われる。それは、理性の開放性、愛の行為、暗号の直観そのものである。

(3) 理性と愛と暗号

『真理について』における暗号については詳しくは次の3で見ることにして、理性と愛の概略、及び理性と愛と暗号の関係を瞥見しておきたい。

・理性

理性は「統一への意志」（Wille zur Einheit）、「交わりの意志」（Kommunikationswillen）と規定され、あらゆるものを一者との関連において結び付けようとする働きとされ、あらゆるものの「絆」（Band）と呼ばれている。理性は、一見関係のないもの同士も、それらの根源を問い、関連を見出そうとする。従って、理性は単に存立するものを受け取るだけではなく、問いかけ、動揺させ、運動へともたらす。一者へと開かれる「開放性」（Offenheit）が理性の本質とすることができる。全てのものの統一が内在者において現存しない以上、理性の統一は言わば開かれた統一、そのつどの統一作用そのものと捉えることができる。

しかし理性自身は何も生み出さないとされ、どのような場面で働くかが問題である。理性は実存に担われることによって、その意義を全うできる。普遍的なものを突破している（ないし普遍的なものから外れている）実存が、理性を行使することにより、全てのものの統一が目指されるのである。内在的な自己に担われた場合、内在的な自己の目的を達成するための計画や作業を理性は行うことになり、制限された働きしか発揮できない。「理性はそれ自身では何も生み出さない。理性は、存在しているものと存在しうるものが現成し（sich zeigen）、そして展開せずにはいられないようにする。理性は端的に

包むもの（das schlechthin Umfassende）であり、全てを開くもの（das Allaufschließende）である」（Jaspers 1947:968）。

・愛

「愛は最も固有の本質であり、自己存在と愛は同一（identisch）である」（Jaspers1947:988）とされるように、ヤスパーズは、自己存在の本質を愛と考えている。「我思う」という意識一般の思惟は、対象的認識や自覚の明確さの条件であるが、自己存在そのものではない。また、「私は私の愛する能力において私を自分の意のまま処理できる（verfügen）のではなく、私は私に贈られるのである（geschenkt werden）」（Jaspers1947:988）とされている。さらに、「愛は私の本来的な自由であり、即ち充実されている自由であり、その中で私は私へと飛翔する（aufschwingeren）。しかしこの自由には最も決定的で超越的な従属（Abhängigkeit）が結合している」（Jaspers1947:989）と述べられている。これの引用では、明確に愛は本来的な自由とされている。実存の特徴は自由であり、その自由は恣意ではなく超越者から贈与されるとヤスパーズは繰り返し述べていることを考えると、ヤスパーズが実存の本質を愛と捉えていると言える。「超越的な従属」とは、超越者からの被贈与と、絶対的現実性としての超越者による充実のことを言っていると思われる。

愛の規定としては次のような叙述がある。「愛は結合するもの（Verbindende）であり存在するものの絆である。即ち愛は一体化することへの衝動であり一つであること（Einssein）の開顕（Offenbarwerden）である。愛は一者（das Eine）を思惟すること全てにおける推進力であり、充実するもの（Erfüllende）である。従って愛は分離において一体化することであり、一体化されていること（Einsgewordensein）の内にある。分離においては愛は運動であり、即ち他者（der Andere）における一者へ、また一者の全体への傾向性であり、関与であり、押し迫り（Hindrängen）である。一体化されていることにおいては愛は安らぎである」（Jaspers1947: 991）。

運動、動因、目標が語られており、分かりづらい叙述であるが、愛は結合するものとされている。分離している状態にあっては、愛は一体化へ向う原動力であり、一体化の根拠である一なる存在を開示することでもある。一体化されている状態では、そこでの安らぎである。我々は愛を、現存在の四分五裂の状態において、超越者という一者を目指し結合してゆく原動力と捉えることができるだろう。語義的・論理的には、実存は「外に出ている

もの」であり、根拠・根源である超越者へと関わるものであるが、より実践的な表現としては、実存は愛として一体化を探求するものと言えよう。

・理性と愛と暗号

ヤスパーズは、理性と愛と暗号それぞれの特徴について詳しく述べているのだが、それらの関係については、十分明確には述べていない印象がある。ヤスパーズの叙述から三者の関係を窺うことができる箇所を参照したい。

「時間現存在の内で我々に可能な真理存在の完結として、我々が最終的に理性、愛、暗号という形でその回りを巡回し (umkreisen) ようとしているものは、それ自体において一者の内にある。我々は完結する場合は不分離であるものを分解し、順々に論究する。真に哲学することは集中 (Konzentration) であって、その集中の内では理性は空間と運動を、愛は充実を、暗号は存在意識の内実 (Gehalt) をもたらす」(Jaspers1947:962)。理性の知、愛の動因、暗号の直観という三者は別のものということではなく、我々が真理へと向っている際の、統一への運動の三つの側面と考えられる。それらは、相依相属しており実際には分離不可能である。我々が引用した叙述においても、「絆」(Band) という表現が、理性にも愛にも使われており、三者を峻別することは重要視されていないと考えられる。

しかし理性、愛、暗号は本来は一つのものとしても、時間現存在においては分離している。その分離における三者の関係については次のように言われている。「理性は無限の運動において、愛がその内で充実を得るような存在の客観性によって、拠り所 (Halt) を見つける。この客観性は、もはや認識の対象となる何らかの客観的なものではありえない。何故なら真理の完結は、認識の峰 (Gipfel) としての客観の内では到達されず、本来的には客観ではない、全ての認識を踏み越える客観の内では到達される。即ち我々が暗号、象徴 (Symbol)、比喩 (Gleichnis) と呼ぶものの内で到達される」(Jaspers1947:1022)。この引用からは、理性の開明化の運動は、愛の一体化が示されるような象徴で完成が示されると理解できよう。その一体化の象徴は、むしろ通常の認識の対象であるような内在者ではなく、暗号である。我々は、『哲学』における実存の「想像」を、個々の暗号は事物の完成した姿を示すと考える (3) が、ここで述べられているのはそれと同じことと思われる。暗号は、理性や愛の活動の根拠ないし手引きと言えよう。そして暗号は実存にとって客体なのであるが、「本来的には客体でない」、「一切の認識を越えた客体的なもの」と述べられている。この意味

は、『哲学』の暗号論において、暗号の中に「滞留する」(verweilen) などと言われている、「暗号と実存の一体化」という事態と同じと思われる。実存の暗号解読とは、暗号に参加しその実現を図ろうとすることであり、暗号は主客を超越しており、単なる客体ではない。

実存は、理性による開放性の中で暗号を手引きに一体化を追求する。そのため、一体化を追求する愛が最も根本的であり、理性も実存もその局面という解釈もある (4)。ヤスパーズも先に触れたように「自己存在と愛は同一 (identisch) である」としている。実存は「外に出ているもの」であり、それが由来するところの根源へと還ることを追求する。実存がそこから由来する根源とは、全ての統一たる超越者に他ならないのであり、実存することには超越者への希求が伴っている。その意味で、一体化への欲求である愛は実存と同一視できる。しかしながら、愛と実存が同一であるあり様は、理想的・本質的な様相であり、時間内では理性、愛、暗号は、それぞれ別の現象である。実存の根本状況は、真理の未完結性でもあるが、同時に真理への道の多重性でもあると言えよう。

3 暗号の概念的規定

暗号の基本的な規定は『哲学』と『真理について』でほぼ共通していると思われるが、『真理について』ではより概念的に暗号が語られ、『哲学』における神秘的な印象が薄まっていると思われる。

(1) 主体と客体の統合としての暗号

暗号が超越者の現象であることを、『真理について』では、主観性と客観性の分裂と統合ということで語ろうとしていると思われる。『哲学』において暗号は、単なる客観ではなく、暗号への実存の「滞留」(Verweilen) や「沈潜」(Vertiefen) が語られていた。しかし「対象性を横切って (quer)」、「内在的超越者」、「実存と超越者との間の仲介者」などという規定は、理解しがたい面があることは否めない。『真理について』では、主客を越え包む「包越者」概念が提出されたことを受けて、暗号がより概念的・理論的に叙述されていると思われる。

主観と客観の関係に関する叙述をいくつか検討したい。「この存在への本来的関わり (eigentliche Seinsberührung) という課題が、象徴 (比喩あるいは暗号存在) を充実する。この象徴が、今の我々の主題である。暗号は客観でもないし主観でもない。暗号は主観性によって浸透さ (durchdringen) れている客観性であり、しかも全体的に存在がそこで顕現するような仕方なのである」

(Jaspers1947:1030)。ここで言われる「存在」とは主観と客観の全体としての包越者であり、超越者と思われるが、それとの関連が暗号の内実と言われている。この引用にある「客観でも主観でもない」、「主観性によって貫徹されている客観性」といったことは、今まで見たことで言えば、「実存の関与」、「実存と暗号の一体化」ということであると言えよう。

「主観と客観の両極性 (Polarität) においてのみ、我々の生は存在する。この両極性において客観は、客観を存続させると同時に止揚するあの浮動 (Schwebe) へ至りうる」(Jaspers1947:1031)。この引用では主観と客観の両極性を保持することが、我々の生のあり様、つまり実存のあり様であると述べられている。そして何度か言及した「浮動」が、その両極性の内にあることとして語られている。暗号が主観との関係から分離せずに、つまり単なる客観とならずに、実存の自由が関与し、主観との相互依属の関係にあることが、浮動と言えるのである。

「しかし結局のところ、本来的な存在意識 (Seinsbewußtsein) はいかなる立場でもない」(Jaspers1947:1048) という叙述も、ある一定の立場に局限されない浮動の状態を言い表していると思われる。

客観性の限界を主張し、対象的存在の意義を否定するだけであるならば、単なる相対主義となるか、あるいは現実から遊離し単に自己のみを主張する主我主義となってしまう。そうした場合、実存にとって世界把握や行為の基準がなくなることになり、「超越すること」は単に世界や現実の否定ないしそれらからの逃避になる。それに対して、「この [浮動の] 飛翔 (Aufschwung) にとっては二つの前提条件がある。即ち、一切の客観性はその相対化において把握されるべきであり、そして遠方の一者 (Eine) における拠り所 (Halt) は消えてしまわないことが必要である」(Jaspers1947:1048) と言われている。実存が現実へと関わるためには、何らかの拠り所が必要であるが、それは手近な世界内にあるものではないため、「遠方にある」と表現されている。そしてこの拠り所は、全ての統一である一者である。もちろん拠り所とはいっても、世界内の行為の目的や手引きのような単に従属するものではなく、実存が理性を行使し全てのものの統一を求めるとした場合、無限の目標であると言えよう。

(2) 超越者の言葉 (Sprache) としての暗号

『哲学』でも暗号は超越者の「言葉」とされていたが、「言葉」という用語は概念的・論理的には曖昧な印象がある。この「言葉」という規定が、『真理について』ではあくまで「比喩」(Gleichnis) であるとされている。「我々

が暗号存在を一つの言葉 (Sprache) と呼ぶことは、なるほど事柄に対応して述べられている比喩である。我々は実際、暗号に向ってその意味 (Bedeutung) を尋ねるのである。我々は各々の暗号に対して諸々の解釈 (Deutung) を試みる。このような開明によって我々は同時に、暗号を深めること (Vertiefung) を経験する。しかしながら、いかなる述べる解釈も十分ではないことが分かる。暗号は無限の (unendlich) 意味すること (Bedeuten) であり、その意味することに対しては、いかなる限定された解釈も適当ではないし、その限定された解釈はむしろ解釈そのもののうちで無限の解釈する運動を要求するのである。この解釈することは暗号の意義の一つの認識の形式ではなく、むしろそれ自身一つの比喩の行い (ein gleichnisshaftes Tun) であり、一つの遊戯 (Spiel) である。解釈することは不可能である。存在それ自身が現在しており、それは超越者である (Das Sein selbst ist gegenwärtig, die Transzendenz.)。超越者は無名 (namenlos) である。我々がそれについて語ろうとすれば、我々は無限に多くの名前を使って、そしてまたそれら全てを廃棄する。意味しているものがそれ自身存在なのである (Das, was bedeutet, ist selber Sein.)」(Jaspers1947: 1033)。

今まで見たようにヤスパーズは、暗号は解釈されないことを繰り返し強調している。暗号は、別の暗号を書くことによって解読されるものであった。別の暗号を書くことは、一種の解釈とも言えるが、限定された対象の解釈のように別の対象でその意味を理解することではない。意味や解釈という言葉を使うなら、暗号は無限の意味の源泉であり、暗号解読は無限に続く解釈の過程と言える。実存が直面する状況の意義は無限であり、また状況に直面しての実存の行為は完成ということがありえず、無限に続くものである。对象的に明確で確固とした基準による解釈ではなく、常に「比喩」という性格を持ち、実存の行為は固定的な法則によっては測れない「遊戯」という性格を持つ。「言葉」は確かに何かを表現するものであるが、ある言葉の意味は別の言葉により理解され、その別の言葉もまたさらに別の言葉によって理解され、この過程は無限に続く。通常という言葉と暗号の違いは、通常という言葉はそれが表わす対象が限定されているのに対して、暗号の対象はその限定を被らない点であると言える。限定を被らない対象とは、超越者に他ならない。しかしまた暗号と別に超越者がある訳でもなく、暗号と超越者を分離させれば、記号とそれが表わす物の関係の如く、解釈可能な限定された関係となる。「存在それ自身が現在しており、それは超越者である」との表現は分かりづらい

が、現前しつつ超越的であるという、弁証法的なあり方として理解しておきたい。超越者は暗号において現象するのだが、あくまで超越者そのものは実存にとって対象とならない。超越者は様々に性格づけられ名づけられるが、そのどれも不適切な点がある。それ故超越者は「無名」である。しかし逆に言えば、どの名称も超越者を確かに表している。超越者の名称あるいは暗号は、名称や対象によって、その名称や対象とは異なる何かを表すような関係ではなく、名称自身、対象自身がそのものとして顕現している、という性格がある。このように『真理について』では、「言葉」、「解説」という規定が、実は譬喩または説明手段である点が、概念的により明確に説明されている。

4 開放性と暗号

(1) 顕現と開放

『真理について』の大きな特徴として、暗号解説の未完結性、暗号の「開放性」(Offenheit) がより強調されていることが挙げられると思われる。『哲学』でも暗号の「多義性」が語られるなど暗号解説は常に運動しており終結しないことが論じられており、また超越者の充実した顕現 (Gegenwart) と超越者の隠匿による開放は相即している (5) ので、比重の置き方の違いと言ってしまってもできる。しかし『真理について』では、時間における真理の完成ではなく真理への道が説かれ、理性の開放性が繰り返し強調されていることを顧慮すると、少なくともヤスバースの論究の焦点は開放性に移っているのと言えるのではないか。

暗号によって存在そのものが顕在するのであるが、先に見たように時間内では真理は完結しないのであり、存在の顕在も完結として、即ち静的な完全な形で、可視的なものではない。「我々の可能な完結は<媒介> (Vermittlung) の内にある。一なる神 (ein Gott) への飛翔 (Aufschwung) は現象の世界を通して進んで行く。我々と一なる神の間にある一つの媒介へと世界が変容することは、世界が<暗号存在>に変容することである。現実性そのものが一なる神であることを、我々は間接的にのみ世界の実在性 (Realität) において世界の言葉を通して経験する。我々はそのことを暗号の覚知 (Innewerden) における我々の飛翔によって経験するが、その暗号のそれぞれは、我々に対していかなる安らぎ (Ruhe) も与えず、我々にとって、より遠い飛行 (Flug) への突き放し (Abstoß) となる。一なる神についての直接的な経験が存在するならば、その経験は伝達不可能で (inkommunikabel) あろうし、またそれ自身、時間の経過

(Folge) の中で間接的にのみ世界における諸現象を通して証明され、回想され、確信されうるであろう」(Jaspers1947:1051)。

先に見たように、時間の内での真理そのものの完結はありえず、愛、理性、暗号という道があるだけであった。その道がここでは「媒介」と呼ばれていると言えよう。実存は一なる神へ直接至るのではなく、現象である世界を媒介とする必要がある。もし一なる神の直接経験があったとしても、それは世界内の言葉では伝達不能であり、世界における媒介で理解されるしかない。そして世界の内では「現実性そのものが一なる神である」と言われている。この意味は、超越者は具体的な感性的な対象として直接顕現するのではなく、暗号解説の際にその現実性として顕現しているということだと思われる。暗号解説すること、理性により統一をはかること、その働きのにおいて、その働きの根拠であり、目標という形で超越者は表れていると考えられる。

さらにこの引用では個々の暗号は安らぎを与えず、むしろさらに超越する契機であると言われている。理性、愛、暗号がそれぞれの内に安らぎを蔵していると言われていたのに、『真理について』の最後に至って、それを否定するような叙述になっている。個々の暗号が暫定的なものであり、むしろその暫定性によって真に超越的なものへの探求を促すと理解できると思われる。個々の暗号の不十分性については、すぐ後で考察する。

非完結性について先の引用に続く叙述を引用しておきたい。「一なる神へは唯一の道 (Weg) のみが存在するが、その道の途上では存在するもの全て、我々が会うもの、我々自身がそれであるものや我々が為すものが、我々に透明に (transparent) なる。この透明化 (Transparentwerden) が暗号になること (Chifferwerden) であり、そして暗号になることは、広がって行く諸々の意味の深みへどこまでも進んで行き、この意味の一つの意義 (Sinn) も終結させ可知的に完成することはない。我々は、意図や企画によってそれについて聴き取ること (Vernehmen) を我々が強制しえない暗号文字に対して、常に我々を開いておくべきである。存在するもの一切が暗号にならねばならない。そのことは、日常生活の実在性の尺度では夢や遊戯のように思われうるものに基づきながら、我々において作用する真剣さ (Ernst) である」(Jaspers1947:1051)。

ここで言われている「透明」になった存在としての暗号という考えは、『哲学』にも見られる。我々は、「透明」を、物事が本来の由来である超越者との繋がりにおいて受け取られ、絶対的現実となることと解する。ここでは

「開放」(offen)、「開放性」(Öffentlichkeit)との関係で「透明」が語られていると受け取れる。暗号は透明と言われても、物事の意味が対象的な意味で完全に明らかになることではない。むしろ、暗号は内在的な思惟による目論みや計算では測れない現実性である。内在的な思惟によっては、物事の一側面、概念的に把握できる一部のみが把握され、物事の現実そのものは把握されない。それ故、暗号を聴き取ることを意図的に強制することはできないとされている。我々ができることは、暗号へと開かれておくことであり、一切を暗号として受け取るような態勢にあることである。このようなことは、内在的な有用性や即物性からすれば無意味であろうが、実存的には真剣に希求されるべきである。ここで「開放」と言われることは、暗号へと開かれることであるが、常に開いた態度を維持すべきであり、一切が暗号となるべきとされている。従って、「開放」は一つの暗号に止まらず、あらゆる暗号に開かれてあるという意味を持っていると思われる。

(2) 個々の暗号の不十分性

先ほど言及したように、『真理について』では、個々の暗号の不十分性が明確に語られている。暗号解読の未完結性を踏まえれば、個々の暗号はそのつどの充実を与えるものであっても、それは時の経過に従い別の暗号にとって代わることになる。最終的なものは超越者そのものであり、超越者そのものへ至ることが模索されるのは当然である。ヤスパースは内在者を介しての超越を繰り返し説き、『真理について』の最後近くでも、「<我々は神の現実性に直に飛び込め (sich stürzen) うとすること、道を逸する>」(Jaspers1947:1050)と述べるのであるが、先にも引用したように、「その暗号のそれぞれは、我々に対していかなる安らぎも与えず、我々にとって、より遠い飛行への突き放しとなる」(Jaspers1947:1051)とも述べている。「より遠い飛行」という言葉に個々の暗号の乗り越えをヤスパースが考えていることが表れていると言えよう。

ヤスパースは、暗号と暗号ではない「一なる神」との区別でこの問題を考えようとしているように思われる。この場合の一なる神は、あれやこれやの暗号で顕現する神ではない。一者、全ての事物の起源、世界の創造主、人格性、三位一体として一なる神を捉えることは、「常に同一であり、全てはせいぜい比喩であり指標 (Zeiger) である」(Jaspers1947:1052)。「神は暗号ではなく、現実性そのものである」(Jaspers1947:1051)故に、一なる神の「直観的な暗号」を断念することをヤスパースは

主張する。「私が各々の直観的な暗号を断念するならば、私は思弁の形式的超越 (formale Transzendieren) の中で、超越者へと向かって世界を突破する (durchbrechen) 空間を私に開く。私が暗号によって神性を私のより近くへもたらそうと試みれば、そのような暗号は例外なく機能しないに違いない」(Jaspers1947:1051)。この引用では直観的な暗号を断念すべきと主張されている。後で述べるように「形式的超越」について詳論されているのは、『哲学』においてだが、そこでは形式的超越は内在者の浮動性を示すことにより暗号による充実の可能性を開くとされており、「内在者の世界」の突破が形式的超越の意義とされている。しかし『真理について』のこの部分の、「世界の突破」はそれとは異なり、「暗号の世界」をも突破することが語られている印象がある。個々の暗号を越えるということについては、『哲学』における「挫折」(scheitern)の暗号を想起させるし、『啓示に面しての哲学的信仰』(Der philosophische Glaube angesichts der Offenbarung,1962)における「全ての暗号の彼岸」(Jenseits aller Chiffren)という節で語られる、「暗号の世界」からの超出に類似している。

このあと『真理について』では、啓示を排他的に主張する「啓示宗教」が批判され、『啓示に面しての哲学的信仰』の内容に接近を見せている。ヤスパースから見れば、超越者は実存に対してそのつどの現れとしての暗号として顕現し、具体的な神の顕現はありえない。これに関しては、詳細な議論が必要と思われるが、『真理について』では簡単な叙述があるだけである。

(3) 暗号と一者への飛翔

ヤスパースが考える一者への道は次のように述べられている。「一なる神は、何らかの排他的なやり方 (Weg) で確定された仕方で獲得されることはない。全体の中で、歴史的な深さから、一切の思考可能なものや一切の経験可能なものを包越することの中でのみ、一者への飛翔 (Aufschwung) は行われ、その一者は、世界よりも少なくとも空虚でも抽象的でもなく、世界を包越しており、この世界の中では一切が一者に関係することによって自らの最高の可能性へと高められるのである」(Jaspers 1947:1053)。

一切の思考可能なものや経験可能なものを包摂し統一にもたらすが、一者への道であるとされている。存在を包越者と規定し、統一への意志、交わりの意志としての理性を、超越することの手段として提示したことに、この一者への道は対応していると思われる。ここで言われる一者への「飛翔」が何であるかが問題となるが、「飛

翔」という語は『哲学』でも『真理について』でも多用されており、本論考でも既に何度か出てきたが、概して内在を超越し超越者へと開かれることと言える。少し前には「浮動する覚知」(das schwebende Innesein) (Jaspers1947:1046,1048) へ至ること、「私がどこにも固定されていない限り、どこにも座礁し (festfahren) ていない限りで、私は存在を覚知する (inne sein)」(Jaspers1947:1046) ことも「飛翔」とされおり、また先にも引用したが「本来的な存在意識はいかなる立場でもない」(Jaspers1947:1048) とも言われており、「浮動」に到達することが飛翔と考えられる。浮動は暗号について言われていたので、暗号への飛翔とも受け取れる。ただし一者への飛翔は個々の暗号の不十分さが説かれた後で語られているので、若干疑念を覚える。暗号が純正であるためには浮動でなければならず、浮動を暗号の根底として提示したのと考えられる。「歴史的な深さから、一切の思考可能なものや一切の経験可能なものを包越する」ということは、そのつどの現れとしての暗号に止まらない広がりを感じさせる。

「根源は神の内に存する。存在が各々の人間に現われること、そして存在が彼に現われる仕方を通して、彼が成るものは、神から彼に贈ら (schenken) れねばならない。自らを伝達する哲学は、現実性を与えるのではなく、現実性を覚知させる」(Jaspers1947:1054) という言葉を見ると、存在の具体的顕現が考えられている印象がある。また、『真理について』は次のような言葉で終わっている。「哲学は覚醒させ、注意深くし、諸々の道を示し、一つの道のり (Strecke) を遠くへと導き、最終的なもの (Äußerste) を経験するように熟達 (reif) させる」(Jaspers1947:1054)。「存在が現れること」、「最終的なものの経験」という表現は、暗号ではなく、神の具体的経験という印象がある。そのような経験は啓示と呼ばれるのが適当であろうが、しかし、直前で啓示信仰の批判が展開されている。従って、浮動がそのように言われていると考えるのが適当と思われる。しかし曖昧であることは否めない。

いずれにせよ個々の暗号の否定、啓示信仰の批判、超越者への飛翔が語られる部分は、『真理について』の大部さに鑑みて量的にも僅かであり、叙述が性急である印象を受け、十分判明とは言えない。我々は、暗号現象には充実と開放の相即があるとだけ受け取っておきたい。暗号を越えたものの論究や啓示信仰の論究は、本格的には『啓示に面しての哲学的信仰』で行われると言えよう。

5 真の統一への開放

『真理について』における暗号思想についてまとめれば次のように言えよう。『真理について』における暗号の基本的な規定は、『哲学』と同じと考えられる。『真理について』の大きな特徴は、「統一への意志」、「交わりの意志」としての理性が主張されるようになり、超越者が「包越者の包越者」(Jaspers1947:110) という表現で統一として語られるようになるのに応じて、あらゆるものの統一という真理への、時間内の道として暗号も語られるようになる。あらゆるものの統一としての一者は『哲学』にもあった規定であるが、包越者という概念によって、より理論化・明確化されたと言えよう。また、包越者が主客を越え包むものという規定で語られるのに応じて、暗号も主客の統合として語られる。

そして、時間内では真理は完結しないことがより深刻に受け取られるようになっており、暗号解読の未完結性・開放性がより強調されていると思われる。『哲学』においても暗号の多義性や暗号解読には終わりが無いことが語られていた。『真理について』では理性の統一作用との関連で、暗号や真理の未完結性が語られている。完結への道は、現存しない統一を予想しつつそこへと向う運動、統一作用そのものであり、また個々の暗号はそのつど完成しているとも言えるのであるが、無制限の交わりという観点から見た場合、個々の暗号はそのつどの現れであり、暫定的である。簡単に言えば、暗号解読の充実と開放の相即の内、開放に焦点があると言えよう。「暫定的」ということも、真の統一に向っている中で言えることであり、真の統一に向い乗り越えていくことが「開放」である。

注

(1) 拙論「ヤスパース『形而上学』における「暗号」思想」、『米子工業高等専門学校研究報告』第号、2012年、参照。

(2) Jaspers1947 ‘は、『真理について』 Von der Wahrheit(1947), Neuausgabe, Piper, München, 1991 を表し、引用した頁数を付す。

(3) 前掲拙論参照。

(4) 斉藤武雄『ヤスパースにおける絶対的意識の構造と展開』、創文社 (1961)、第二刷、1981年、総580頁、275-291頁。

(5) 前掲拙論参照。